様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月　９ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６０８

研究課題名（和文）中世末期から近世初期の常用的漢字と常用的和訓についての横断的研究

研究課題名（英文）Cross-sectional study of common Chinese characters and common Japanese WAKUN from the end of the Middle Ages to the early modern period

研究代表者
白井　純（SHIRAI, JUN）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・准教授

研究者番号：２０３１２３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：中世日本語の漢字表記には、どのような漢字を用いてどのような和訓で読むのかという日本語特有の複雑な問題があり、イエズス会の外国人宣教師が日本語で宗教書を出版する際に大きな課題となった。
キリシタン版『落葉集』は常用性を根拠として掲載漢字と和訓を選別した漢字字書である。必要となる漢字字種を吟味し、常用和訓を定訓として位置づけてキリシタン版の翻訳文献での漢字表記に反映させたことは特筆すべきであり、当代の日本側文献との比較でも有効性が確認できる。現代の常用漢字に匹敵する漢字整理として評価できるが、一つの漢字を一つの和訓で読むことには限界があり、一字多訓の複雑さへの対応は不十分であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
キリシタン版『落葉集』は日本語の漢字表記の課題を解決するために行った漢字整理の成果を示す漢字字書である。それは中世の日本語表記に対する漢字の選別と常用和訓の整理であり、本研究は漢字字書と文献用例の双方からその有効性を検証した。
漢字整理の本質的意義は現代日本語の常用漢字にも似通っているが、一字多訓の整理は不完全なものにとどまっている。中世から近世にかけての日本語の一字多訓は複雑な状態であり、整理には限界があったためである。一方で、文献用例で比較的自由な同訓異表記の整理にはさほど重きを置いていないことは、国語政策としての常用漢字の意義を再評価するための事例としても注目すべき特徴である。

研究成果の概要（英文）：The kanji notation in medieval Japanese had a complicated problem peculiar to Japanese, such as what kind of kanji and Wakun were needed. It became a major issue for Jesuit foreign missionaries to publish religious books in Japanese.
The Jesuit Mission Press in Japan "Rakuyoshu" was a Chinese character's dictionary that selects the Kanji and Japanese Kanji readings based on its addictiveness. It is noteworthy that the Kanji and Japanese Kanji readings were selected by careful selection based on medieval Japanese, and also it can be evaluated as a table of kanji and Kanji reading such as modern "Jouyou-Kanji". Although it was an excellent idea to correspond one kanji with one Japanese Kanji reading, but it was insufficient to deal with the complexity of Japanese writing system.
The characteristics of such a Japanese language study book are strongly expressed in "Rakuyoshu", and it is necessary to position it differently from the genealogy of Japanese old dictionaries.

研究分野：日本語学

キーワード：和訓　キリシタン語学　漢字整理　常用漢字　落葉集　キリシタン版

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

キリシタン版漢字字書『落葉集』（1598 年刊）はキリシタン語学、即ち外国人宣教師による宣教のための日本語学習とその知識を活用した日本語表現のための漢字字書であり、同時代の日本側の漢字字書にみられない多くの特徴を持つ。掲載にあたっては常用性の高い漢字と和訓を取捨選択しており、一部のキリシタン版国字本の文献用例との強い関連があることが指摘されてきた。

しかし、本研究を構想した段階では他のキリシタン版国字本や当代の日本側文献との比較が十分になされておらず、当代語の実態に即して『落葉集』の漢字と和訓の常用性を検証する必要があった。また、活字印刷されるキリシタン版ではそれを事前に活字として制作しておく必要があった筈で、常用性の高い漢字と和訓の選別は、キリシタン版国字本の印刷事業全体を左右するキリシタン語学上の重要な課題でもある。その漢字整理の実態を把握することは、当代語の漢字表記の実態を解明することと共にキリシタン語学の特質を解明するためにも重要な研究課題だと思われた。

２．研究の目的

本研究は、『落葉集』掲載の漢字と和訓の常用性を当代の日本側文献との比較のもとに検証し、当代語の漢字表記の実態を解明すると共に、キリシタン版国字本の表記体系の分析を進めることを目的とする。

キリシタン版は規範性の高い日本語を用いており、漢字と和訓も取捨選択されると同時に、外国人宣教師による日本語の運用を念頭にした漢字整理が行われている。この漢字整理は現代日本語の常用漢字にも匹敵するものだが、常用性の高い漢字の選別だけでなく、一字多訓および同訓異表記の整理という日本語の漢字表記独特の課題があった。

日本人による漢字表記の伝統を無自覚的に受け継ぐ文献ではなく、日本語学習者の視点で日本語を学習して運用することを目的とする漢字整理は、日本側の文献用例の調査と、宣教上に必要となる表現力の双方に配慮した十分な吟味が行われていたと考えられる。その実態を分析することで、当代日本語の漢字表記の本質的部分が明らかになると同時に、字音と和訓をもつ日本の漢字表記への適応というキリシタン語学上の問題解決の方法を探ることができる。

特に、和訓の整理には個々の漢字と密接に結びつく常用性の高い和訓＝定訓の存在が重要になるが、『落葉集』では漢字の左右傍訓として他の和訓とは明確に区別されている。複数ある和訓を日本側文献やキリシタン版の文献用例と比較するだけでなく、定訓として扱われた和訓の有効性を探ることも、本研究の重要な目的である。

このことは現代日本語の常用漢字が行う漢字整理と本質的に類似するが、常用漢字に含まれる漢字には和訓を持たず字音でしか読まない漢字が多くあるのに反して、『落葉集』では殆どすべての漢字に最低一つの和訓が当てられている。その和訓には、通常はその漢字の和訓として用いにくい和訓も相当数含まれたと思われる。つまり、個々の漢字に最もよく結びつく和訓を挙げることは個々の漢字内での和訓の序列を考慮したものだが、その和訓（和語）を常用的にその漢字で表記することを保証するものではないことが予想される。つまり、ある和語をどの漢字で書くのかという同訓異表記の問題との間には相当の乖離があってもおかしくない。それを明らかにすることは、定訓の概念を再検討することにもつながるだろう。

３．研究の方法

本研究は、漢字字種と和訓の双方の常用性を当代の文献用例との比較のもとで検証する。

日本側の文献として、漢文訓読資料『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の漢字と和訓の調査を行った。同書には寛永 8（1631）年に心蓮院で刊行された古活字版 2 種と、それに基づき慶安 3（1650）年に野田弥兵衛（京都）が出版した覆刻整版がある。活字版には心蓮院版に関わった顕證によると思われる片仮名による訓読が記入されており、覆刻整版はそれを反映して片仮名付訓も印刷してあるが、一部に本文や訓読の相違がある。

また、キリシタン版国字本との比較を行うため、既に研究のあるキリシタン版『ぎやどぺかどる』（1599 年刊）の他、すべての後期国字本を対象として悉皆調査を行った。『さるばとるむんぢ』（1598 年刊）、『朗詠雑筆』（1600 年刊）、『どちりなきりしたん』（1600 年刊）、『おらしよの翻訳』（1600 年刊）、『ひですの経』（1611 年刊）、『太平記抜書』（刊行年不明）である。このうち、『ぎやどぺかどる』『どちりなきりしたん』『おらしよの翻訳』『ひですの経』は翻訳文献なので漢字表記は『落葉集』の漢字整理を直接反映することが可能だが、『朗詠雑筆』『太平記抜書』は日本の古典文学に基づくので表記もそれに左右される。また、『ひですの経』の表記は他のキリシタン版国字本とは異質である。

これとは別に、近世前期のいろは和訓引き韻書『廣益以呂波雑韻刊誤』（いろは韻）（寛文 10（1670）年刊）の調査も行い、『落葉集』の和訓との比較を行った。

４．研究成果

日本側の漢文訓読資料である『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』では、漢字を和訓で読む場合に和訓全体を記入した例、送り仮名のみを記入した例、および全く記入しない例がある。記入の方針として、難読和訓はそれだけ手厚く書き込むことが予想されるので、これを 2 点、1 点、0 点で点数化し、活字本 2 種と整版 1 種の同一箇所毎に集計した。すべての資料に和訓全体が記入されれば 6 点になり、難読和訓であると予想される。結果として、全体として『落葉集』掲載の漢字字種では不足すること、点数の高い和訓には定訓から外れた和訓が多いことが確認できた。反対に、点数の低いグループでは定訓への一致が多くみられるので、定訓として安定して読めることを前提として、訓読の書き込みを省略したと判断できる。そこから、同時代の漢文訓読資料での定訓の有効性を確認することができた。その成果は、白井純（2020）「『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の刊行―印刷方法と訓読方針の関係について―」『高山寺経蔵の構成と伝承』高山寺典籍文書綜合調査団編として発表した。

また、キリシタン版国字本の漢字と和訓の実態を調査するためにすべての文献のテキスト化を進め、あわせて文字画像の切り出しを進めた。そして調査結果をキリシタン版の印刷術から観察し、従来指摘されているよりも多くも木活字が運用されていたことを指摘した。この木活字の運用は漢字の不足によって生ずる問題の解決方法として導入されたものだが、『落葉集』の 2,200 字という漢字集合は翻訳文献での漢字の運用をおおむね満たす水準であると共に、日本の古典文学を再現した『朗詠雑筆』『太平記抜書』で高頻度となる漢字字種の殆どを含んでおり、漢字集合としてよく吟味されていることを実証的に明らかにした。この成果は、白井純（2020）「キリシタン版のタイポグラフィー―活字の制作と運用について―」『北研学刊』18 号として発表した。

キリシタン版国字本の漢字字種は『ぎやどぺかどる』『ひですの経』『朗詠雑筆』『太平記抜書』で多くその他は少ないが、内容や読者層の違いを反映している。そして、漢字字種が少ない文献では定訓から外れた読みがみられない。

	7 文献	6 文献	5 文献	4 文献	3 文献	2 文献	1 文献	文献なし
本・色・小に共通	68	74	198	620	351	209	135	23
色・小に共通	4	7	6	42	49	54	54	28
本・色に共通	2	2	5	18	10	5	4	
本・小に共通			1	4	7	8	10	9
本篇のみ				3	1	4	2	1
色葉字集のみ			1	1	4	2	5	5
小玉篇のみ			1	4	8	25	38	34
国尽のみ				1			4	2
小計	74	83	212	692	431	307	253	102
落葉集なし			1	7	55	267	815	

表１　キリシタン版国字本 7 文献での使用状況と『落葉集』での掲載状況（数詞は除く）

表１の横軸はキリシタン版国字本での漢字使用の状況で、7 文献＝すべての文献に現れた常用性の高い漢字である。1～2 文献＝出現の少ない漢字、文献なし＝全く現れない漢字は常用性が低い。縦軸は『落葉集』での掲載の状況で、字音語掲載の「本篇」、和訓いろは引き「色葉字集」、字音部首引き「小玉篇」の主要 3 部（および地名・官職名掲載の「国尽」）での掲載状況で、A：本色小＝すべての部での掲載の漢字字種であり常用性が高く、各部にしか掲載のない漢字字種は常用性が低い。つまり、表の左上のグループは常用性が高く、これがリンクしていれば漢字字書と文献用例の間でのずれが少ないことになる。

文献用例の多い常用性の高い漢字は殆ど『落葉集』に掲載されている。反対に、文献用例の少ない漢字字種、特に 1 文献のみ現れた漢字字種（多くは用例 1 回のみ）では掲載が少ない。『落葉集』はキリシタン版国字本の漢字字種に対して十分ではないが、文献用例のない漢字字種は 102 字種に過ぎず、しかもそこには「小玉篇」で掲載のみられる部首字を多く含んでいる。部首字は部首を代表する漢字字種として常用性を無視して掲載したと思われるので、全体としては常用性を強く意識した漢字集合となっている。

一方、一字多訓については整理が不完全である。「色葉字集」では 1 訓字 1,745 字、2 訓字 158

字、3 訓字 16 字、4 訓字 2 字（多訓字 9.2%）であり、『ぎやどぺかどる』では 1 訓字 1,083 字、2 訓字 58 字、3 訓字 6 字、5 訓字 2 字（多訓字 5.7%）対して十分な多訓字を持つように見えるが、実際にはこれが有効に機能していない。

訓数	組数	『ぎや』当該字種使用なし	『ぎや』利用和訓			
			1 訓	2 訓	3 訓	4 訓
2 訓字	158	79	67	12		
3 訓字	16	6	5	5		
4 訓字	2			2		

表 2　『落葉集』と『ぎやどぺかどる』の一字多訓の比較

「色葉字集」で 2 訓を持ち 2 箇所に掲載される漢字字種のうち、実際に『ぎやどぺかどる』でも 2 訓の両方が現れた漢字字種は 19 字種に過ぎず、『ぎやどぺかどる』の一字多訓の実態を充足し得たとは言いがたい。常用漢字が漢字表記の体系性を念頭に置いたものだとすれば、『落葉集』の定訓はそれとは異なり、個々の漢字内での和訓の優先性を表したものである。したがって、複数の和訓が結びつきやすい漢字の序列 2 位の和訓が、もともと和訓と結びつきにくい漢字の序列 1 位の和訓よりも、漢字表記の実態としてはよく用いられることは不自然なことではない。そうした和訓の一部は、和雲いろは引きの『落葉集』「色葉字集」では一つの漢字を複数箇所に掲載することで対応しているが、文献用例の一字多訓の実態を十分に反映するものにはなっていない。以上の成果は、白井純（2022）「キリシタン版『落葉集』所収漢字と和訓の常用性」『訓点語と訓点資料』148 輯、および、白井純（2021）「辞書と文献の比較に基づく定訓論の再検討―キリシタン版『落葉集』と『ぎやどぺかどる』を中心として―」『日本語文字論の挑戦』加藤重広・岡墻裕剛編（勉誠出版）として発表した。

『落葉集』の掲載漢字は、常用性の高い漢字を殆ど含み、常用性の低い漢字の掲載には消極的である。漢字集合としてみた場合、よく吟味されたと言ってよいだろう。しかし『落葉集』の漢字整理の具体的実現である『ぎやどぺかどる』においてすら、一字多訓の実態を十分に反映したものとはなっていない。このことは、日本の古典文学の表記をある程度再現したキリシタン版『太平記抜書』や当代の日本側の漢文訓読資料『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』ではより顕著になり、『落葉集』の定訓から外れた運用が多くみられる。

	漢字字種	定訓の有効性	一字多訓への対応
ぎやどぺかどる	おおむね十分	有効	不足
太平記抜書	不足	有効	不足
脩華嚴奥旨妄盡還源觀	不足	有効	不足

2,200 字に満たない漢字字種は、漢語を多く含む文献での必要性に対して明らかに不足している。成熟した漢字仮名交じり文である『ぎやどぺかどる』の漢字字種が少ないのは、翻訳文献での表記をあらかじめ吟味して『落葉集』の漢字集合を編集したということに尽きる。但し、『落葉集』に掲載した漢字の殆どはキリシタン版国字本で実際に使用されており、漢字制限としてみれば無駄がない。

一方、定訓はここで検討した文献では安定して有効性が確認できた。このことは、本研究の結論として重要である。但し、一字多訓については、『落葉集』の定訓をよく反映した翻訳文献『ぎやどぺかどる』ですら必要を満たしていない。ここには一字多訓の複雑さと量的な問題が現れたものとみられるが、キリシタン語学の漢字整理の限界ということにもなるだろう。結果として、『落葉集』は当代日本語の漢字表記の実態に対して、漢字字種と一字多訓への対応が量的に不足しているが、掲載する漢字と定訓の増加は日本語の学習および漢字字書の使用を難しくしてしまう。そうしたコストを低減した学習用漢字字書としての設計自体は優れた見識に基づいており、十分な成果を挙げていたとみて良いだろう。

キリシタン版の活字印刷術としても、漢字字種を少なくすることにはコスト的なメリットがある。基盤となる常用性の高い漢字字種を金属活字で製作しておき、文献毎に不足した漢字字種を即席の木活字で対応するという印刷術が実践されたということである。このことは事前の準備不足というより、金属活字を制作するコストの増大を避ける現実的対応だったと考えられる。

なお、本研究の実施期間中に、ブラジル国立図書館で現存が確認できる 4 冊目のキリシタン版『日穂辞書』の存在を新たに確認した。同書には『落葉集』の定訓を利用したローマ字表記への訓釈がみられ、『落葉集』の定訓の特徴を分析するための重要資料でもある。これに関連した成

果として、エリザタシロ・白井純編（2020）『リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵日葡辞書』八木書店を刊行したほか、同資料発見の経緯について、白井純（2019）「新出キリシタン版・リオ本『日葡辞書』について」『國學院雑誌』120-3 号、SHIRAI Jun (2022), Background and significance of the copy of the Vocabulario discovered in Rio de Janeiro, Brazil, Múltiplas Faces de Pesquisa Japonesa Internacional: Integralização e Convergência, Yūki Mukai, Kimiko Uchigasaki Pinheiro, Kaoru Tanaka de Lira, Marcus Tanaka de Lira, Yuko Takano, ed.:Pontes Editores を発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 白井純	４．巻 -
２．論文標題 辞書と文献の比較に基づく定訓論の再検討　ーキリシタン版『落葉集』と『ぎやどぺかどる』を中心として	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本語文字論の挑戦	６．最初と最後の頁 152-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白井純	４．巻 -
２．論文標題 『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の刊行―印刷方法と訓読方針の関係について―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵の形成と伝承』	６．最初と最後の頁 153-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岸本恵実／白井純	４．巻 59
２．論文標題 新出本・ヘルツォーク・アウグスト図書館蔵ローマ字本『コンテムツスムンヂ』（1596年天草刊）について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白井純／タシロ・エリザ	４．巻 120-3
２．論文標題 新出キリシタン版・リオ本『日葡辞書』について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 國學院雑誌	６．最初と最後の頁 L1-L7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 白井純	4．巻 42
2．論文標題 印刷技術からみた日本語文献の歴史（On the Japanese books history from a point of printing technique）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Estudos Japoneses	6．最初と最後の頁 57-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井純	4．巻 148
2．論文標題 キリシタン版『落葉集』所収漢字と和訓の常用性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 訓点語と訓点資料	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井純・中尾祥子	4．巻 81
2．論文標題 広島大学図書館蔵「いろは韻」2種の掲載漢字と和訓について―聚分韻略・落葉集との比較を含めて―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 広島大学文学部論集	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 SHIRAI Jun	4．巻 -
2．論文標題 Background and significance of the copy of the Vocabulario discovered in Rio de Janeiro, Brazil	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Multiplas Faces de Pesquisa Japonesa Internacional: Integralizacao e Convergencia	6．最初と最後の頁 29-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白井純	４．巻 18
２．論文標題 キリシタン版のタイポグラフィー―活字の制作と運用について―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 北研学刊	６．最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　5件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 白井純
２．発表標題 キリシタン版にみる中世日本語の漢字と和訓の常用性
３．学会等名 日本語学会2020年度秋季大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井純
２．発表標題 リオ本『日葡辞書』発見の経緯と意義
３．学会等名 第13回ブラジル日本研究国際学会（XIIICongresso internacional de Estudos japoneses no Brasil）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 SHIRAI Jun
２．発表標題 The Rio de Janeiro Copy of theVocabulario da lingoa de Iapam
３．学会等名 International Symposia Vocabulario da lingua de Japao (1603) ―A Missionary Liguistics approach（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井純
２．発表標題 キリシタン版ローマ字日本語文の疑問符―疑問文の文末位置以外にみられる用例を中心として―
３．学会等名 広島大学国語国文学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 白井純
２．発表標題 印刷技術からみた日本語文献の歴史
３．学会等名 第12回ブラジル日本研究国際学会（XII Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 白井純
２．発表標題 キリシタン版の言語規範からみた『ひですの経』
３．学会等名 第12回ブラジル日本研究国際学会（XII Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 白井純
２．発表標題 キリシタン版『落葉集』所収漢字と和訓の常用性
３．学会等名 訓点語学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 エリザ・タシロ・白井純	4．発行年 2020年
2．出版社 八木書店	5．総ページ数 868
3．書名 リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵　日葡辞書	

1．著者名 岸本恵実・白井純	4．発行年 2022年
2．出版社 八木書店出版部	5．総ページ数 168
3．書名 キリシタン語学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

HU-plus vol.14　広大教員が近著を語る
https://archive.hiroshima-u.ac.jp/koho_press/HU-plus_vol.14/html5.html#page=13
Only 4 in the World
https://www.shinshu-u.ac.jp/english/topics/research/only_4_in_the_world_.html

リオ本『日葡辞書』発見
https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/sirai_1/2018/10/126825.php

リオ本『日葡辞書』の発見
https://company.books-yagi.co.jp/archives/6797

キリシタン文献をMissionary Linguistics（宣教に伴う言語学）の視点から読み解く―『キリシタン語学入門』の刊行―
https://company.books-yagi.co.jp/archives/7996

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

ブラジル	サンパウロ大学（USP）	リオデジャネイロ国立図書館（BN）		